

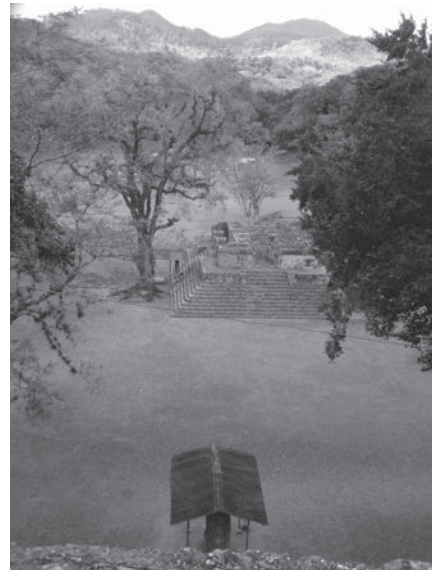
# 世界遺産コパン遺跡における文化資源の活用について

木村 仁美

人間社会学域 人文学類 4年

## 1. 派遣日程・訪問先

派遣期間は2011年2月3日から2月23日であった。派遣先は、ホンジュラス共和国のコパン・ルイナスにあるホンジュラス国立人類学歴史学研究所西部地区という世界遺産コパン遺跡の管理をしている施設の作業、及びコパン考古学プロジェクト（PROARCO）の作業に参加し、加えて、付近の博物館や遺跡などを訪問した。訪問先は、コパン遺跡公園、石彫博物館、マヤ考古学博物館、野鳥公園、蝶公園、キリグアの遺跡群と遺跡公園、リオ・アマリージョ遺跡公園、ラ・エントラーダ地域エル・プエンテ遺跡公園および博物館、コパン・ルイナスのカシーケ・ランピーラ小学校である。



## 2. 調査地、及び調査目的

コパン遺跡はホンジュラス西端に位置する古典期の東南マヤ低地の政治・経済・宗教の中心地として栄えた大遺跡である。マヤ文明はメソアメリカ古代文明圏のなかでも特に重要な文明として知られ、都市工学、絵画、彫刻、文学、科学、数学、巨大建築にいたるまで、高い水準を誇る文明である。特に、コパン遺跡は、古典期という地域全体に政治的覇権を及ぼす統一王朝が存在せず王国間で優越と従属の関係があった中、ほとんどの期間を通して古典期の代表的な優越王国の一つであった。そのような重要遺跡であるコパン遺跡は、世界各地から興味を持たれ、出土した土器やヒスイ製品、石造彫刻といった遺物、王墓や巨大建築、石造住居といった遺構などからさまざまな調査研究がなされている。さらに、現在、コパン遺跡は国立遺跡公園としてホンジュラス国立人類学歴史学研究所の管轄下にあり、年間約17万人の内外の観光客が訪れる国内最大の文化観光資源である。

しかしながら、1990年代にトンネル発掘法による



図-1 コパン遺跡公園

アクロポリスの調査は、初期のコパン王朝史を解明するのに大きく貢献した反面、発掘されたトンネルの大部分が補強も埋戻しもされなかったことが原因でアクロポリスの構造的な安定性を崩すことになり、その折に、1998年の「ハリケーン・ミッチ」という大きな自然災害が発生し、コパン遺跡はかなりの被害を受けることとなった。また、コパン遺跡のその重要性が見出された際に、開発途上国ホンジュラスでは、コパン遺跡に近い飛行場を作りアクセスを良くすることで観

光客を呼び込むという、より綿密な遺跡調査よりも観光事業への還元が優先された。しかし、飛行場の滑走路拡張により発見されていなかった遺跡が破壊されるという事態が起こったのである。

それらの反省から、考古学における調査と保存が同時並行的に進められなければならないことを明確にし、コパン遺跡に修復・保存中心のプロジェクトが創設され、今まで欧米のフィールドであったこの遺跡に日本人ディレクターとして中村誠一氏が活躍された。氏は、それ以前にもコパンの周辺地域のプロジェクトを手掛け、コパン遺跡では、王墓の発見という大きな事業を成し遂げ、その後、日本の支援金によりコパン考古学プロジェクト（PROARCO）を実施するなどコパン遺跡の調査・保存・修復に深く関わっている存在である。

今回、筆者は、世界遺産であるコパン遺跡での遺跡公園の管理運営活動の補助、及び日本人が指導するプロジェクトへの補助という形でこれらの活動に参加することで、世界遺産というフィールドでどのような取り組みが成されているのか、また日本人が日本ではないフィールドに関わるということはどういうことなのか、などを実体験から考察することを目的とする。

### 3. 調査内容と成果

#### ・PROARCO における作業

まず、PROARCO における発掘・修復・ラボ作業への参加である。それらの作業は、当時 PROARCO が取り組んでいたコパン遺跡の中心グループの北に位置する、グループ 9L-22, 9L-23 において行なわれていた。

発掘作業（図-2）は、パティオと呼ばれる住居に囲まれた方形の空間において完掘までの一連の流れに参加することができた。参加した発掘作業の具体的な内容としては、現地の発掘担当者に指示を受けながら発掘、遺構の実測、遺構・遺物の記録、ふるいを使った小遺物の取り上げ、取り上げた遺物の洗浄、トータルステーションを利用した測量である。

筆者は、学部生という立場であり、大学の授業において実際の発掘作業に参加できる機会はほとんど存在しないのが現状である。さらに、自身がそのような現場を探し当てたととしても、一連の作業に参加しかつ完掘まで参加できることはまれである。加えて、筆者が今まで経験したことのある発掘現場は砂漠地帯であったため、雨がよく降る湿気が多い地域での発掘参加は



図-2 発掘作業

初めての体験であった。そのため、周囲の環境の違いから作業内容や使用する道具、準備段階での作業が変化すること、しかし発掘の基本概念が変わることがないということ学ぶことができた。初歩的なことではあるが、今後別のフィールドへ赴く場合や前例のないフィールドで手法を模索していかなければならない場合、自身にとって持ち得なければならない概念だと考えられる。

修復作業（図-3）では、滑走路拡張作業により被害を受けた石造建造物の壁面解体作業に参加した。この作業には、発掘、測量、修復それぞれの分野を専門としている職員が作業を伴いして手際よく作業を共にしていた。コパン遺跡では、90年代の発掘作業時の保存への配慮の少なさから人為的に被害を受けた場所が多数存在した。中村誠一氏がコパン遺跡で最初に取り組んだプロジェクトはそのような事態への対処として立ち上がった保存・修復中心のものであり、それにより培われた経験や育成された人材によって、現在は私のような経験の浅いものにも参加することができる状態が整っていたのである。

ここで、筆者が思考をめぐらす観点と言え、それ



図-3 修復作業

ぞれの専門に特化した者の存在であろう。日本の考古学の現場では、基本的にすべての作業がこなせなければならないが、海外の調査団ではそれぞれの作業に専門とする者がいるという形が主流である。両者にメリットデメリットが存在するため、比較して片方を否定するというのは見当違いだと考えるが、中米ホンジュラスという国においてその形がとられていることはこの国を発展させるためにも非常に効率的であると考えられた。開発途上国ホンジュラスは中南米でも最貧国の一つに位置付けられており、世界遺産コパンの調査・修復・保存活動への支援が必要とされている。日本からは、「文化遺産無償援助」による遺跡調査保存用の機材供与や専門家派遣による修復保存指導が行われた経歴があり、この PROARCO では、分野ごとの専門家として現地の人々が働いているという現状であった。

ここには、日本という決して近くはない国が関わることの重要性を垣間見ることができる。資金提供や日本からの人的派遣による支援では、いつか底をつくことが目に見えているため、その後の継続を考えると、現地の人を育成し仕事を与えることが必要とされる。言葉で言うのか簡単だが、実施しようとする時間

支える側の力も必要とされるものは大きく、さまざまな困難に向き合わなければならない。しかし、それを考えることが遺跡を有する場所に住んでいる人々が求めていることである。そして、私が参加したここコパン遺跡に関わる作業では、現地の人々が仕事として働いており、それを統括する日本人の姿があった。日本のようにすべてをこなす人材を一人育て上げるよりも、多くの人が遺跡を保存していく作業に関わることができており、それを支えているのが発掘作業を全面的に学んできた日本人であるという良い事例であろう。

また、世界遺産であるコパン遺跡の周辺にはコパン・ルイナスがあり、観光客を受け入れる宿泊施設がその中にある。ホンジュラス国立人類学歴史学研究所で働いている職員も、その村で暮らし、その村で子や親戚が暮らしていた。つまり、村で暮らしている人々の中で、遺跡保存のために働くということが一つの仕事として成り立っているのである。日本でも、無形有形問わず価値ある文化資源が存在するが、それをすべて維持していくことは困難であり、本学でも地域創造学類という新しい学部分野が創設され地域の発展について取り組んでいる。その中でも、よく問題として挙げられていることは、過疎化により小さなコミュニティが文化資源を維持することが困難になっていることである。コパン遺跡は世界遺産であるため、資金援助の面で言えば日本の過疎化地域と比べるものではないのだが、維持していくためにはそこに住む人々にとって、文化資源が当たり前である必要がある。したがって、コパン遺跡での地域住民にとって重要な観光資源であると同時に働く場所であるという事実は、文化資源を保存していくための良い形だと考えられる。

次に、ラボ作業についてであるが、ここでは、修復作業の際の石造建造物の実測図や土器の実測図のトレース作業（図-4）、及び土器の分類（図-5）、土器の修復作業（図-6）を行った。

実測図の書き方は国などで異なるため、現場において教授を受けることは他の何よりも効率的であった。

#### ・コパン遺跡周辺の遺跡とその博物館

コパン遺跡は、コパン遺跡公園、アクロポリスの地下トンネル、石彫博物館の3つの観光スポットがあり、コパン・ルイナスにはその市の博物館が存在する。石彫博物館は、実際の遺跡公園内には保存の関係上現場で保存展示することができず移動可能なものを回収し展示してあり、代わりに遺跡公園内にはレプリカを置

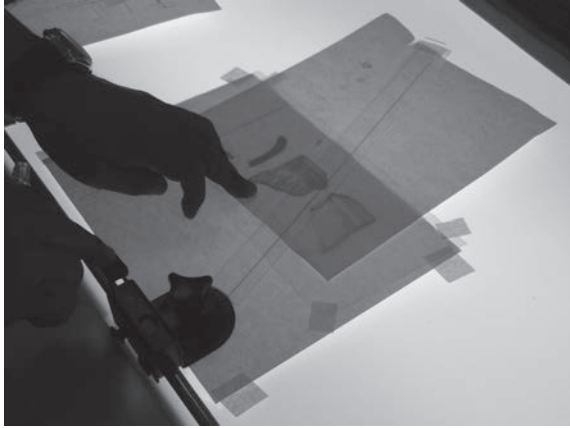


図-4 実測図トレース作業

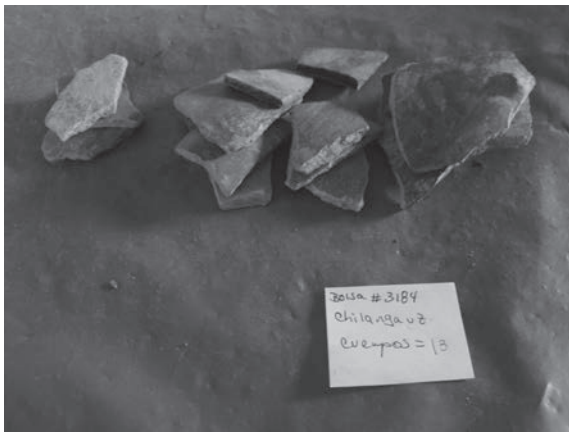


図-5 土器分類



図-7 神聖文字の階段



図-6 土器修復作業

いてあった。雨の多い地域であるため、石彫の外での保存はなかなか難しく、例えば、神聖文字の階段（図-7）はその場から移動させることができないが年月や風雨による劣化から解読できなくなっている部分もある。現在では劣化の進行を抑えるため屋根を設置しており、その他石碑などにも同じように屋根を付けてある。これはキリグア遺跡といった周辺の遺跡でも見ら

れる。しかしながら、移動することができないものを保存する方法には遺跡公園自体の外観を損ねず、かつこれ以上の劣化を防ぐという問題があり、屋根を付けるだけで解決されるものではない。これは、現在の修復理論が空間性の保持や最小限の介入を重要視していることから、この地域だけにとどまらず多くの文化遺産を保存し展示する上で継続して考えていかなければならない問題点である。そのため、今後さらに改善を加える必要のある項目であると考えられた。

また、コパン遺跡及びその周辺の遺跡は、巨大建築物のみならず、その自然環境の保護にも力を注いでいる。例えば、コパン遺跡では、遺跡公園入口付近にグアカマヤと呼ばれるホンジュラスの国鳥コンゴウインコを飼育している（図-8）。グアカマヤは遺跡の石彫のモチーフにもされており、これから遺跡公園を散策する者に楽しみを提供することもできる。また、数ヶ所ではあるが、コパン遺跡の遊歩道の中などに植物の名前がわかるよう看板が付いているという工夫もある



図-8 コパン遺跡公園内でのグアカマヤの飼育



図-9 植物の名前を記入した看板



図-10 エル・プエンテ遺跡

(図-9)。それらは、遺跡公園内の遊歩道歩く楽しみにもなっていると考えられる。この、遊歩道という手段は、コパン王朝の衛星都市であるエル・プエンテ遺跡(図-10)では特に力を入れており、遊歩道内にスペイン語と英語で説明を付けたいくつかの説明書を建て遊歩道を通る者に知識と散策の楽しみを与えていた。このような説明書は長すぎると訪問者は読まない



図-11 エル・プエンテの遊歩道での歩行者への配慮  
訪問者が自然と触れあう機会として、コパン・ルイナス内には、野鳥公園や蝶公園(図-12)といった施設も存在する。

ため、エル・プエンテ遺跡の遊歩道では、できる限り短く簡潔に伝える配慮が見てとれた。これは、博物館内の解説にも同じことが言える。

文化資源というものは、ただ見ているだけでは学び取れない数々の魅力が存在する。それを、できる限り訪問者に伝えようとする努力が、保存し展示していく上で必要とされることであるということが、この遊歩道への取り組みから感じることができた。しかし、植物が密集している中を通り自然を感じることを目的としている遊歩道には、その管理が大きな問題である。例えば、歩く人への配慮として、木の根に引っかからないように歩く道の整備が必要とされる(図-11)。遺跡公園として整備するということは、遺跡の保存のみならず、博物館以外でも訪問者への配慮が必要であり、それが過剰になりすぎ自然を壊す行為へとつながらない考慮も必要とされるという大変複合的な保存展示作業であると考えさせられた。

文化資源は、その土地に住んでいた人々がその中で暮らしたからこそ生まれるものであるため、土地の自然環境や生態系について学ぶ必要性は高い。しかしながら、筆者自身、そのような自然分野の博物館というのは普段見られない物珍しい動植物等を見る場所というイメージが強く、おそらく遺跡を目的にしてきた訪問者はあまり近づかないのではないかと考えられる。コパン遺跡公園は遊歩道という形で自然分野を取り入れてはいたが、野鳥公園(図-12)におけるガイドの内容の大半が鳥の生態系の話であったことから、おそらくコパン遺跡から自然分野の博物館までの訪問者の流れを作っていないと考えられる。現在、文化遺産の保存には科学的要素が強くなっており、文系だけで



図-12 左：野鳥公園 右：蝶公園

はなく理系が介入することが必要不可欠となっている。そのことから、文化資源の博物館は自然分野の博物館とのつながりに目を向け、さらに複合的に知識を深めるための場所を提供する必要があると、筆者は考える。

#### ・語学面について

海外のフィールドの最初の難関は、やはり言語である。中米はスペイン語が公用語であり、基本的に英語は使えない地域である。そのため、スペイン語での意思疎通が必要とされる。ここ、コパン・ルイナスではスペイン語の語学学校が存在し宿泊施設も整っていることから、エルサルバドルなどの近隣諸国への訪問を目的とした人々が語学学習のために訪れることも多い。筆者も、コパン・ルイナス滞在時はスペイン語学校に通い語学学習を試みた。新しいフィールドを開く際には語学で躓いてはいけませんが、コパン遺跡を訪問する人々にとってスペイン語学校の存在はコパン遺跡を訪れたことからより多くのものを得る機会を提供できると考えられる。これは、コパン遺跡を遺跡公園として整えたその後に付随するものであるため、これもまた、PROARCOでの仕事のように遺跡公園によって生み出された仕事の一つと言えるだろう。このように、文化資源は、そのみならず、多面的に派生し多くのものを生み出す可能性を秘めたものであり、それらも視野に入れて文化遺産を守るためにすべきことを考えていく必要がある、と筆者はこの経験から考えることができた。

## 4. 今後の展望

世界遺産コパン遺跡における、さまざまな取り組み

に参加することで、文化資源の調査・保存・展示が離して考えられない、一貫して取り組まれるべき事項であり、さらにそこに住んでいる人々や自然環境との関わりの深さや他国が介入することの意味を実体験から考えることができた。つまり、文化資源を守っていくということは、それ自体だけでなく、多面的な関わりに目を向ける必要性があり、他国に我々が介入することやフィールドマネージャーという存在はその能力を求められているのだ、と筆者は考える。

今後の展望として、筆者は本大学の修士課程に進んでもからも現在進行中の南イタリアの壁画調査プロジェクトに参加するため、本調査の経験を生かし、文化資源を守っていくことへの知識と経験をさらに深め、文化資源に対するより良い活動ができるよう尽力を尽くしたいと考える。

### 謝辞

今回の調査を行うにあたり、中村誠一先生、中村慎一先生、北海道大学博士課程今泉和也さん、コパン考古学プロジェクト（PROARCO）のスタッフの皆様、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所西部地区職員の皆様、ホームステイ先のご家族の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

### 参考文献

増田義郎顧問『神秘の王朝—マヤ文明展』TBS 2003  
中村誠一『マヤ文明を掘る—コパン王国の物語』日本放送協会

2007